

A-1 海とともに生きるまち



安房自然村の森から眺望する布良と平砂浦

海に囲まれ、陽射しの強い館山は、森や海で豊かな生命が育まれている。岩場の多い海岸は天然の良港となって、人びとは古くから漁を営んできた。歩いて渡れる沖ノ島の波打ち際には、イルカの追い込み漁をして焼いて食べていた痕跡があり、那古地区の稲原貝塚からは、イルカの骨に刺さった黒曜石の矢尻が発見されている。

海の道を通じて広く世界とつながり、行き来をしていた歴史があり、安房の国から都へ干したアワビを税として貢納していた。奈良の平城京跡からは、安房の地名が書かれた木簡という荷札がたくさん出土している。



木簡

のしあわび



黒曜石に刺さったイルカ骨

(レプリカ：館山市立博物館蔵)

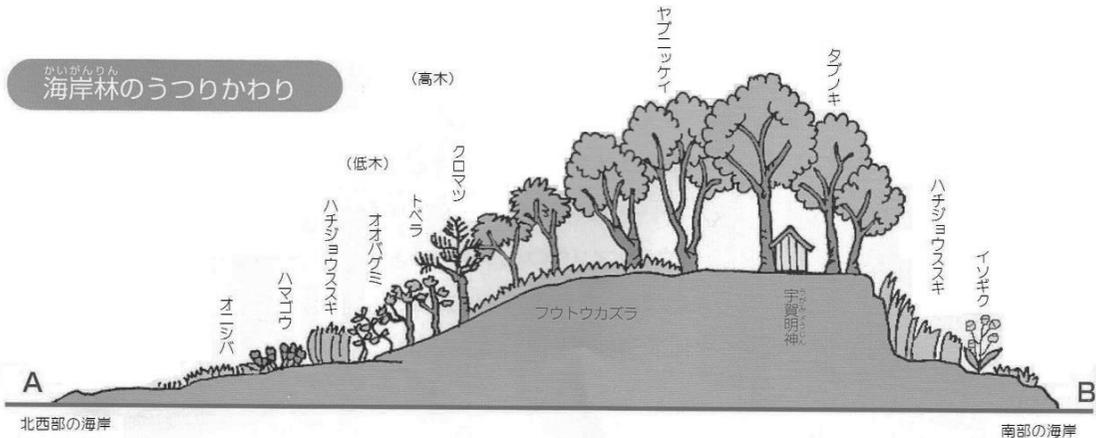


●歩いて渡れる無人島「沖ノ島」

海の向こうに富士山を望む館山湾は、その美しさから「鏡ヶ浦」または「菱花湾」と呼ばれ、古くから文人墨客に愛されてきた。



沖ノ島は、周囲約1km、高さ12.8m、面積約4.6ha、かつては離れ小島だったが、現在は砂洲でつながった小島である。海上自衛隊館山航空基地の北東に隣接した小さな丘も、かつては高ノ島という離れ小島だったが、埋め立てによって内包とされ、森の茂みがその名残りを見せている。どちらも、タブノキ、トベラ、ヤブニッケイなど、房総半島南部に原生していた自然林を観察することができる。その植生は約240種にのぼり、北限・南限の貴重なものであるという。



サンゴやウミホタルが生息する北限域であり、さまざまな生態系を観察することができる海辺の自然学校として人気がある。海岸で珍しい貝殻や流木、イルカの耳骨や化石などを拾う宝探しを「ビーチコーミング」という。

かつて世界中で貨幣として使われていたといわれるタカラガイは、「貝」の象形文字の原型ともいわれ、世界で約 250 種、日本で約 100 種、そのうち館山周辺では約 50 種が見られる。イルカの耳骨はその形状から「布袋石」とも呼ばれ、人気が高い。

海岸でゴミを拾って観察してみると、アジアの文字が書かれたものがあり、黒潮に乗って流れてきたことがわかる。



ビーチコーミング

●沖ノ島のサンゴ

沖ノ島周辺に生息するサンゴは約 30 種が確認されている。冬になると表層水温が 10℃まで下がることもあるが、大潮のときには、南側の浅瀬で海面から出たキクメイシモドキを見ることができるという。



タカラガイ



イルカの耳骨